

日本医学教育学会第34回大会：昭和大学医学部（2002年）*1

高木 康*2

日本医学教育学会第34回大会は、2002年7月26日（金）・27日（土）の2日間、片桐敬大会長（昭和大学医学部長）のもと、昭和大学キャンパスを会場として開催された。

開催に至るまで：日本医学教育学会から第34回大会主管の要請を受けたのは2000年であり、医学部教育委員会に諮り、正式に主管校となることを決定した。医学部のほかに歯学部、薬学部、看護専門学校、この年には保健医療学部も開設され、文字通り医系総合大学となった昭和大学の特色を生かした大会とすることを目指し、医学部教育委員ばかりでなく、各学部の代表数名を実行委員として、大会運営の検討を始めた。

大会の基調テーマ：卒後初期臨床研修の必修化が目前に迫り、これに呼応しての診療参加型臨床実習の導入、モデル・コア・カリキュラムの提示と共用試験の導入など医学教育がダイナミックに変革し、さらには教員の教育業績評価が強く要請され始めた時期であり、これらを念頭に置き、基調テーマは「医学教育—改革の波—」とした。そして、会場は昭和大学医学教育の現場である大学施設を利用した質素な大会とするが、歯・薬・看護学教育も含めた幅広い医学教育を討議できる内容とすることとした。

大会の概要：特別講演は「卒前教育の国際化」をテーマとして、「医学教育の国際比較」を神津忠彦教授（東京女子医科大学）に、「海外での学生実習」を内山利満教授（東邦大学）にお願いし、多くの観衆が医学教育の国際化の最新情報に耳を傾けていた。

シンポジウムⅠは「卒後臨床研修必修化への期待」で、①卒後臨床研修必修化の経緯、②大学病院の立場から、③臨床研修病院の立場から、④臨床研修医の状況、⑤行政の立場からの要望と期待、という時宜を得た内容であり、会場は立錐の余地もなく、参加者で溢れかえり、全員で来るべき初期臨床研修必修化を予測した。また、シンポジウムⅡは、医系総合大学に相応しいテーマである「歯学・薬学・看護学教育の改革と医学教育との連携」であり、歯学・薬学・看護学教育の関係者が一同に会して活発な議論が行われた。

ワークショップは「医学教育プログラムのサイエンス」、「共用試験 OSCE—医療面接での標準化—」といずれも時宜を得たテーマとして参加者の熱心なワークが行われた。

ミニシンポジウムでは専門的な講演と討論が行われ、「医学教育者とSPの語らいの夕べ」ではOSCEで重要な役割を演じてくれるSPと医学教育者とが忌憚ない意見を交換した。

要望・一般演題は157題と過去数年で最多であり、題数の多さもさることながら、過渡期にある医学教育の現状を反映してセッションテーマが多岐にわたった。そして、700名を超える参加者が、充実した内容の演題に対して熱心な討議を展開した。

会場の導線での不便さもあったが、手作りの大会という当初の目的を達成し、医学教育の発展充実にいささかでも貢献できた大会であったと考えている。

大会事務局：大会長；片桐 敬（医学部長）、副大会長；島村忠勝（教育委員長）、大会実行委員長；小口勝司（理事長）、大会実行副委員長；高木 康（医学部医学教育推進室長）、教務課事務局；赤堀明人（医学部教務課長）

*1 The 34th Congress of Japan Society for Medical Education (2002), Showa University School of Medicine

キーワード：医学教育—改革の波—、卒前教育、卒後臨床研修

*2 Yasushi TAKAGI 昭和大学医学部医学教育推進室